

書評

レティッシュ著『國際收支と經濟成長』

John M. Letiche, *Balance of Payments and Economic Growth*, New York, Harper & Brothers, 1959, Pp. 378.

小島 清

一 はしがき

本書はカルフォルニア(バークレー)大學教授レティッシュ(一九一八年生れ)の力のこもった處女作である。ドル不足問題の理論的・實證的説明を企圖する勞作は枚擧に暇のない程であるが、本書もまた何らか新しい觀點からこの問題に光を興えようとしている。レティッシュが一體ドル不足の原因を結局どこに求めているかをつきつめることが、この書評のねらいでなければならぬ。

本書は二部に分れている。第一部は六章から成り、國際收支調整メカニズムの理論を、古典派とケインジアンについて批判的に展望し、より一般的なより包括的な彼自身の理論を展開しようとしている。第二部は、四章から成り、第一部で到達した國際收支調整メカニズムの一般理論を現實問題に適用し、ドル

不足の原因を探究することが主題とされている。その特色はイギリスとアメリカの長い歴史的經濟發展の全體的省察から、國際的均衡化とか不均衡化を見出そうとしている點にある。だがそのような長い歴史的發展を取扱うのに、どちらかと言えば短期的靜態論的性格をもつ第一部の國際收支調整理論をもって足りるであろうか、それをコンシステントに適用できるであろうかということが、最初から懐かれる疑問でなければならぬ。

二 國際收支調整理論

著者レティッシュがいちばん據り所とする國際收支調整メカニズム理論はジャコブ・ヴェーゼの一九二〇年の勞作である。この古い勞作——ヒュームやソーントンに先立つ——を發掘し世に紹介したことこそレティッシュの一つの貢獻である。レティッシュが the stream-of-total-expenditure approach と名づける一般理論は(第六章)、つきつめてみると次のようであろう。

入超國Aが爲替切下げとかデイスインフレ政策という國際收支調整策を採ったとして、國際收支が改善するかどうかはそれだけではきまらない——それだけできまるかの如く説くのが多くの部分均衡論的分析であって、誤っている。それだけではなく、一國と外國との總支出流量(貨幣量と流通速度の積)がどう變るかに大きく支配されるというのである。

もう少し詳しく紹介しよう。第一ケースとして入超國Aと出超國Bのいずれにおいても總支出流量が不變に止まるとしよう。Aの爲替切下げは、(1)輸入品が割高になることから代替效

果が生じて輸入量と輸入額を減少させる。(2) B國にとってA國品が割安になるからやはり代替効果によってA國の輸出量と輸出額が増加する。また(3) A國で今迄國內向けであったものが輸出に向けられるという轉換効果が生じ、同じく輸出品の種類と輸出額を増加するというのである(一三一—一六頁)。このような單純な論理は新古典派のタウシクの解明の範圍を出ない。ただ、弾力性に言及しなくても説明しうる(一三一頁註5)と斷言していることには大いに疑問を感じる。ただし(1)について言えば、輸入需要價格弾力性が小さければ、輸入額(自國貨建)は減少しないからである。レティシユは(3)に大きな役割を認め、一國の供給の伸縮性、擴大力、適應力が均衡化過程の重大要因である(一三五頁)としているが、この點には共感する。

第二ケースとして、入超國Aの總支出流量は不變だが、出超國Bで總支出流量が擴大され、物價騰貴が生ずる場合を考えよう(一三六—一四〇頁)。この場合には出超國側の擴大効果とインフレ効果とによって、入超國Aの輸入減と輸出増とは第一ケースよりも大きくなり、國際收支調整はそれだけ容易になる。だがこれと逆に、出超國Bでは總支出流量が不變なのに入超國Aでそれが擴大する第三ケースでは(一四〇—一四四頁)、Aの輸入はかえって増加し、その輸出はかえって減少し、國際收支はいっそう悪化する可能性がある。

これがレティシユの一般的包括的國際收支調整メカニズム論である。たしかにここ三十年來展開された爲替需給安定性論は、精緻ではあるが部分均衡分析たる缺陷をまぬがれない。だ

からそういう部分均衡がのっかっている經濟全體の動きとか適應力に注目すべきだとするレティシユの指摘は正しい⁽³⁾。だがその理論化がタウシクにまで、或はジャーヴェーズにまで遡行した、かくも粗朴なものであることは、いささか期待はずれである。すでにアレキサンダーやジョンソンに同じ問題をつく精緻な展開があることを想起せざるをえない。結局、レティシユによる國際收支調整メカニズム理論の學說史的 연구には、いくつかの興味ある指摘を見出すけれども、全體として大きな貢獻を果しているとは認め難い。

三 工業國對第一次生産國の調整

第一部の理論に比べ第二部の實證的研究の方がわたくしにははるかに興味深い。まず第七章では工業國と第一次生産國の間の國際收支調整問題が取上げられる。この問題を考えるのにアメリカ内部における農工間の調整を吟味しそこから教訓を見出すこととしている點は教えられるところが多い。そこで見出されることは、(1)農業生産は安定的である。それは生産と販賣組織がアトミスタックであり、農業への投入が非彈力的であることに基づく。(2)しかるに工業生産は動搖がはげしい。そこで(3)農産物價格と農家所得は工業の好不況によって年々大幅な變動を経験する。(3)は横軸に工業生産量、縦軸に農産物價格、農家所得、工業生産量、農産物價格、農家所得、縦軸に農産物價格と農家所得を描くと明瞭にわかる(一五七頁、第八圖)。こういう關係はそのまま世界全體の工業品對第一次商品の關係にもあては

まる(一六〇頁、第九圖)。しかもアメリカの世界經濟上の地位、世界景氣の震源地たる地位から見て、アメリカの工業生産の好不況が全世界の第一次商品の相對價格を動かす(一六二頁)という。

第一次生産國の國際收支調整の問題に眼を轉ずると、例えば爲替切下げを行うにしても、第一次生産國と工業國の景氣がどのような狀況にあり、兩者の總支出流量がどう變るかにこそ注目せねばならぬ。その點で第一部の理論と連なる。レティッシュが調整要因として重視する供給の適應力という點において第一次生産國には困難がある。農業の賃金所得と工業労働者のそれとの間には大きな賃金格差があるにも拘らず、兩者間の労働力移動は敏速には行われない。爲替切下げの結果第一次商品輸出價格が有利になつても、工業から農業への生産力移動は、賃金格差の故に生じない。のみならずそういう時(一般的にいえば交易條件が農業に有利化したとき)に轉換資金が獲得できるので、反つて農業から工業への労働力移動が生ずる(一六九—七〇頁)。輸出生産がふやされるよりは從來の輸入品または輸入代替品へ労働力が移動する。これとは逆に交易條件が農業に不利化する場合に反つて工業から農業への労働力移動が生ずる。交易條件の不利化が工業國の不況に發する輸出品價格低下ならば、第一次生産國の工業部門においても失業が發生しておりそれが農業部門へ流れるからである。農業國のインフレにより輸出價格が國內品價格に比べ不利になった場合には、國內消費用に資源が轉換されてしまうからである。こういう第一次生産國

の國際收支調整を困難にするパラドックスの指摘には、大いに興味をそそられる。第一次生産物の交易條件の長期的傾向は、工業國で完全雇用が維持され、工業生産の擴大が第一次生産のそれより速に行われる限り、かなり安定的に維持されるであらう、と付言している(一七六頁)。これも注目されねばならぬ。

四 ヒックスのドル不足命題

第八章「生産性成長率格差と國際不均衡」はドル不足に關するヒックス命題の批判にあてられている。この章と残りの二章とがドル不足問題に直接の關連をもっている。問題は國際收支を不均衡化させるような構造的、制度的要因が長期經濟發展の過程の中で見出せるかという點にある。レティッシュはまずヒックス命題を實證的に檢證し批判するのであるが、その際米國對西歐工業國全體という關係と、米國對英國という關係とでは問題がかなり違うことを豫め頭においている。

第一、米國生産性改善が全般的に他國よりも高いことは、輸出價格の外國よりも大きな引下げを可能にし、外國に國際收支困難を惹起させると、理論的には言いうる。だが實證的には米國生産性改善が西歐諸國や日本より高かったとは言えない——英國は別だが(一八七頁第三表、米英比較は一九五頁第六表)。諸國の完全雇用と高い世界貿易量とが維持される限り、價格と所得の弾力性は大きいから、生産性成長率格差が國際不均衡を生むことはまずまずありえない(二二—二頁)。

第二、米國生産性改善が輸入偏向的であつたか、言いかえれば西歐輸出品と競争する商品に偏つて行われたか——それがヒックスによりドル不足原因だとされた。これも事實によつて否定される。米國の農業生産性は一九二〇—五〇年の間に著しく高まつた(一九一頁、第四表、年率二%)。米國工業の生産性改善が輸入代替品に偏つていたかどうかを判定することは、何が輸入代替品であるかをきめることが困難であるから、いさうむづかしい。三十四の工業品について見ると(一九二—三頁、第五表及び一九七頁第七表、すべての産業についてイギリスの生産性改善が米國及び他の工業國よりも劣つてゐることがわかるだけで、米國の生産性改善が輸入代替品に偏つてゐたという結論には來ない。

第三、世界貿易ないし世界需要の構造變動が西歐の困難をひき起したのでないか。レティシユはチジンスキーらの工業品貿易についての研究成果を利用して興味ある検討を行っている(二〇〇—二〇四頁、第八—十一表)。チジンスキーらの研究は、工業品への世界需要の變動という「構造要因」と、各工業品についての各工業國の輸出シェアの變動に表現される「競争要因」とに二分するものである。レティシユは構造要因が國際不均衡に直接關係をもつものではなく、むしろ競争要因、つまり相對的コスト・ストラクチュア、價格水準、價格構造、所得水準などが競争力を保持・増進するようにたえず調整されているかどうかの原因であると見る(二二〇頁)。だが英國は、世界需要の成長、停滞、後退のいずれの工業においても競争力を

弱めシェアを減らしたのだから、そこに特別の困難が伏在する。結局、「一國の生産性の平均的向上と對世界貿易の絕對量」とが國際收支調整メカニズムを促進または阻害する要因になる(二二三頁)とレティシユはいう。この積極的命題は十分に展開されていないので解釋が困難であるが、世界貿易が急速に擴大し外國の總支出流量が増加している時には、たとえ一國の世界貿易シェアが減少しても、なおその國の貿易の絕對量は増加しうるわけで、そういう時には國際收支調整の困難は生じない(二〇九頁參照)とするのであろう。價格弾力性も所得弾力性もともに大きいからである。

五 イギリスの經濟發展と國際均衡

第九章「經濟成長と國際均衡」と第十章「經濟成長と國際不均衡」とが本書の中核をなすもので、十九世紀のイギリス經濟の發展と二十世紀のアメリカ經濟の發展とを比較對照しつつ、前者は調和的國際經濟の發展をもたらしたが、後者は不調和、不均衡を招來しつつある原因を探究しようとしている。誠に興味ある展開である。

何故十九世紀のイギリスの經濟發展は世界經濟の調和的發展をもたらしたか。イギリスの經濟發展は大まかに、一七八〇—一八五〇年、一八五〇—一九〇〇年、一九〇〇年以降の三期に分ちえよう。第一は英經濟の發展期、第二は轉換期、第三は衰退期であり不均衡化期である。

第一の發展期においては、産業革命とそれに續く工業の機械

化によって農工の比較生産性は大きく開き、農業の比較劣位、食料、原料の輸入が決定的になった。綿工業の生産性改善は著しく、商品交易条件を著しく不利化させながら（一七九八年二二・三、一八一八年一四・二、一八五〇年一二・三、一八八〇年一〇〇）、單純生産要素交易条件は向上し所得水準は高まった。不利になった農業からの海外移民と、海外投資とは新大陸の生産性を高め、輸入食料、原料を割安にした。自由貿易は海外市場を拡大し、英國の輸出を増加し、いっそうの機械化を促進するという、調和的・累積的・加速的發展を導いた。かくてレティッシュは言う。

「比較機械化、自由貿易、勞資の移動というプロセスは、最初は國際的經濟均衡に貢獻した。だがその進行とともに次第に、大西洋の兩岸において、國際的經濟不均衡の潜在的な種を培った。經濟發展が一國から他國へと移っていく時間繼起（並にそれに對する適應または適應の缺除）こそが、十九世紀後半における均衡化プロセスの變革をもたらした最大要因であった。」（二三六頁）

この引用句は重要だと思ふ。結局、レティッシュは、經濟發展のシーソー・ゲームが時に國際均衡を促進し、時に不均衡化をもたらすと見ているのであろう。そうだとすると經濟發展シーソー・ゲームのいかなる狀況が、均衡化と不均衡化をもたらすのか、明らかにされねばならない。これまでのところでは、農業に比較劣位をもつ國が世界經濟のリーダーとして發展したことが、調和的國際均衡をもたらしたと解してよいのではあるまいか。

まいか。

一八五〇年以降の第二期においては、(1)經濟發展の工業歐洲への擴張、一八五、六〇年代、(2)經濟發展の農業國への擴張、一八八〇—第一次大戰、(3)世界最大の經濟力としての米國の擡頭、この三傾向によって、英國の世界貿易中心國としての役割が大きく影響されるようになった（二三六—七頁）。このような經濟發展のシーソー・ゲームとそれにつれての世界貿易パターンの變動が詳しく吟味されているのであるが、この期間に國際均衡化の決定的役割を演じたものが英國の海外投資である。英國の國內投資は一八七〇年を境にして増加率がぶくなく、纖維工業を中心とする英國の産業構造と鐵道などの外部經濟はそれまでにほぼ完成されて、國內投資擴大の機會は少くなつた。重化學工業の新設、擴大、近代化の意欲は少なく、ドイツに先をこされた。そこで英國の貯蓄は収益の高い海外投資に流れ出した。これがまず西歐、ついで米國、カナダ等の經濟發展を促進した。だがそれらの經濟發展が完成してみると、自らの産業構造の高度化と近代化をおこたつた英國は、新しい世界貿易に適應できなくなつてゐることを發見せざるをえなかつた。それが一九〇〇年以降の英國の衰退期であり國際經濟の不均衡化期である。

六 アメリカの經濟發展と國際不均衡

二十世紀に入って英國に代つて米國が世界貿易の要（ピポット）になつたことが、國際不均衡化の原因である。それは制度

的なものかそれとも構造的なものであるか。ここで最終章が米國經濟發展とその世界的影響を取上げることになる。

米國經濟發展の重要な轉換年として一八七五年と一九〇〇年(正確には一八九六年)があげられる。類別貿易を検討すると(一四—一九圖、二七〇—七五頁)、原料だけが出超、粗食料も製造食料も入超であったものが、一八七五年を轉期にして出超に轉じている。農業生産性の急速な上昇があり、英・西歐と補充的であった。一八九六年頃を轉期として、半製品も完成品もそれまでの入超から出超に轉じた。つまり一九〇〇年以降は工業國として英・西歐と競争的になり、全體として出超を續けることになった。ここに國際不均衡化が始まる。第一次大戰後から原料、粗食料、製造食料の輸入は増加しているが輸出も平行して増加し、はつきりした巨額の入超傾向をもつようにはなっていない。豊富な農産生産基礎とその生産性向上が見られるのである。アメリカ經濟の雁行形態的發展がうまく把握できる。

一九〇〇年以降にみられる米國の出超傾向、つまり他國のドル不足傾向の原因を、レティッシュは次の點に求める。第一は、生産能力の増加が國內總支出流量の増加を上回り、過剰能力の傾向をもっていることである(二八三—四頁)。だが第二に、なぜ過剰能力に陥るのか。英國の場合には過剰能力は海外投資に吐け口を求め、それが國際均衡化力として働いたが、米國の場合には國內収益性の方が高いので、海外投資は巨額に達しない(二九六—七頁)。第三に、過剰能力に陥ること、また海外投資が魅力的でないことの結局の原因は「資源が豊富かつ良質であ

り、それが高度の機械化と結びついて、經濟活動のどの重要部門においても強い比較劣位を發生させずに——鑛業とか石油のごとき例外はあるが——經濟發展を可能にした。同じ諸要因が米國內の資本への高収益、工業の一人一時間當りの高生産性、農業の構造的惡調整、そして國際經濟不均衡へのこれら諸力の結合された衝撃、これらの基礎となっているのである。」(二九八頁)英國と比較すれば、豊富な高い生産性の農業と自然資源が、大きな違いだといわねばならない。結局、生産條件の全面的優位ということであろう。

だがレティッシュはドル不足は永續的(クロニク)なものではなく、むしろ制度的な性格のものだと結論する(三〇九頁、また二六六頁)。有效な景氣安定化政策がとられて高成長を保證するとか、資本輸出を促進しさえすれば、ドル不足は殆んど救われる。アメリカの不況のときにのみドル不足は重大となるのだからという(三〇九頁)。だがこのように結論してよいのか。構造的・長期的要因を追求してきた全體の論旨と、景氣的・制度的要因にドル不足を歸する結論との間に、大きなギャップを感ぜざるをえない。

七 若干のコメント

讀み了っていささかすつきりしないものを感じる。それは、冒頭にふれたように、國際均衡と不均衡あるいはドル不足問題を諸國經濟發展のシーソー・ゲームの中に追求しながら、それを解く理論的道具が短期的靜態論的國際收支調整論であるとい

う矛盾、或は最後にふれたように、ドル不足原因を長期的構造
的なものの中に探究し乍ら結局それではなくして景気循環的制
度的要因に歸しているという不可解さに基づいている。

前進すべき方向は二つある。第一は、ドル不足はレティ
シユの言うように結局景気循環的なものであり制度的調整の遅
れに基づくものであるかもしれない。そう見るとハーバラーの
強く主張する、入超國のインフレ論に落着いてしまふ。そして
もしそうならば、ドル不足の發生した一つ一つの時期について
どのような制度的不調整が原因であつたかを見きわめるべきで
あらう。第二は、レティシユが努力の大部分を投入して發見し
た長期的構造的な要因を理論化し、動態的構造的國際均衡・不均
衡の理論を樹立することである。ヒックス命題はなお不十分で
はあらうが、この方向への正しい出發ではあるまいか。例え
ば、イギリスは固定的比較生産費構造の故に、その發展過程で
は世界貿易の調和をもたらしたが、外國の工業化、競争化に遭
遇して衰退せざるをえなかつた。これに比べアメリカは全面的
優位を保持しているから、世界貿易發展のブレーキになり不均
衡化要因を含む。さらにドイツとか日本は可變的比較生産費の
故に生き残りうる。これらのことの理論化が果しえなむもので
あらうか。理論化するに値するいくつかの長期的構造的な要因
を、レティシユが苦勞して發掘し示唆している貢獻は、高く評
價されねばならないであらう。

これら二つの選擇のいずれかを採るかによつて、ドル不足の定
義とかドル不足理論の目的とかも異なつてこよう。第一の途を

とれば、國際收支調整等が發動される限り、どのような種類と
程度の犠牲が生ずるかをかまわないならば、ドル不足は必ず解
消されよう。だが問題はもはやそこにあるのではない。むしろ
世界經濟のリーダーがどのような發展、いかなる行動をとれば
世界貿易がいつそう調和的により大きく擴大するかということ
の發見にしなければならない。それこそ第二の途の追求によつて
始めて果される課題であらう。

(1) Isaac Gervaise, *The System or Theory of the Trade of the World*, with an introduction by J. M. Lefiche and a forward by Jacob Viner, Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1954.

(2) F. W. Taussig, "International Trade under Devaluated Paper: A Contribution to Theory," *Quarterly Journal of Economics*, May 1917.

(3) 小島清「外國貿易」新版一九五七、一六四—七頁。

(4) S. S. Alexander, "Effects of a Devaluation," *American Economic Review*, March 1959. H. G. Johnson, "Towards a General Theory of the Balance of Payments," in his *International Trade and Economic Growth*, 1958, Chap. 6.

(5) H. Tyszyński, "World Trade in Manufactured Commodities, 1899—1950," *Manchester School of Economic and Social Studies*, Sept. 1951.

(一橋大學助教)